

追悼録

後藤君の死を悼む

清水 泰

長い間愛用していた櫛の歯が、ある朝ホロリと一本かけた。なんともいえぬうつろな寂しさ。後藤さんの死を聞いた時、ふつと、そんなきびしさが私の胸をかすめた。

後藤君との交遊はふるい学生時代にさかのぼる。氏はいつもカスリの和服だった。一度後藤君にノートを借りた事がある。その札心で有馬の子持筆をやつたのを氏はいつまでも銘記していて、折にふれ、そのことをいつていた。私は平家物語に修繕寺の筆、巴書いたる筆の軸、というようなことがあるのでやつたように覚えていた。

字はその人の性格を現わすというが、後藤君の字は、すこし線の細い、殆んど楷書に近い正確な字を最後まで書いていた。まことにその通り、後藤君は、地味で、あせらず、てらわず、着実に、日々研究に没頭していた。

いわゆる明治時代に生れた学者の中の学者であつた。

ある若い国文学者が、「後藤先生という人はもつとこわい人かと思つていた。」と、初対面の感想をもらしたことがあつたが、あるいはあの何となくにかむような姿態と、少々甲高いやさしさを持つた声とからは、あの理路整然とした論文を書く人物は想像出来なかつたかも知れぬ。

大学卒業後十何年かして後藤君を立命館大学に迎えることが出来てからは、一時跡絶えていた交友はふたたびよみがえり、共に語り、共に論ずる機会が多くなつた。私も時折後藤家を訪れたが、氏も亦、よく来て下さつた。話はいつも研究のこと、学問以外の話はあまりしたことがなかつた。

戦時中のごとであつた。その頃私もすこし体を弱らせて田舎の親許へしばらく静養に帰つていたことがあつたが、後藤君も大分こたえたらしく、書物を手放す相談に來たり、また、家に田舎からの食料がとどけられた時など、たらふく食べてもらつた事もあつた。

しかし、酒もたばこも飲まなかつた氏は、胸襟を開いて相語る、ということはなかつた。

た。とくに自分の家についてはついぞ語らなかつた。

いつの時代でもそういうことは多少いえることではあるが、とりわけ戦後の学者は人間関係も複雑になり、そのうえ、学校の雑務にしばられて、かつての時代のように、一人書齋に籠つてこつこつと研究を重ねてばかりはいられなくなつて來ている。思えば後藤君はよき時代、恵まれた時代に生れて來た尊い本格的な学者の一人というべきであらう。

「明治は遠くなりけり」

後藤君の靈よ、もつて冥すべし。

(本学名譽教授)

後藤丹治氏のこと

国崎 望久太郎

後藤丹治氏が急逝された。実はあまり突然だつたので何か実感が湧かない。そして今も学校の前のあの家に端然と坐つていられるような気がする。しかし段々そうではなくなりこの世にはいられないことが、後の始末や蔵書の整理という形で、目の前にあらわれてくると、変に寂しい感で迫つて來るのであつた。